月刊ナイトバグ　面白屋台目白押し型リグルのマガジン
NIGHTBUG
2010年 8月号
特集「夏祭り」
いしの日を騒げや遊べ！
読切り作品
SS　:夏樹 真
漫画:秋水/貴キ/羅外/東/
言示弄/キッカ/豆板醤
連載作品
SS　:如月翔/悠奈
漫画:草加あおい/ひどぅん/
クロツク/ぽこ/猫屋敷/

Wriggle
Nightbug
ver. Lyrica

月刊ナイトバグ　2010年8月号

Cover design　小崎

目次 (3p)

リリカスタイル（リリ×リグ推奨委員会）　残虐非道の貴公子　……　2p

eat up a empty pie　秋水　……　4p～10p

リグルが可愛くて生きるのが辛い　東　……　11p～14p

学園ナイトバグ　言示弄　……　15p

※この漫画にリグルは出てきません　羅外　……　16p～17p

リグルともこたん　ぼこ　……　18p

リグルの過冷なる挑戦　猫屋敷　……　19p

蟲カゴ～Compensation to fantasy～　悠奈　……　20p～23p

リグル・ナイトバグの災難　夏樹　真　……　24p～26p

東方非想天則 リグル・ナイトバグ Story Mode 後編　如月翔　……　27p～34p

月別テーマ「夏祭り」　……　35p～53p　扉絵：怒羅悪

-テーマイラスト　……　36p～38p
（斑/ADDA/蛍光流動）

-東方茶湾虫　クロツク　……　39p～43p

-夏の祭りと言えば　貴キ　……　44p～45p

-リグると！　ひどぅん　……　46p

-りぐるみゃの屋台巡り　豆板醤　……　47p～49p

-おまつり　キッカ　……　50p～51p

-無題　草加あおい　……　52p～53p

漫画、自由作品、表1～表4　作者コメント　……　54p

リグル天国ゴールド広告　草葉　……　55p

表紙 かたまりぐる

描いた人 角右衛門 秋水

※.はんぺんとは無関係です。
はんぺん中に名前を入れる場所がないのです
はんぺん食べすぎると具合悪くなるよね!

うえええええ
最近気持ちが悪くて
何その
ぽっこりお腹
大丈夫？
おぼろろろ
最近流行りの
メタボタル？
いえ
↑ヒロインです。
妊娠したのかな？
ビビミッ
その子の事を思うなら
おろすのが一番だと思う
けどな？
二枚に。
シュ
ウ
ウ
ウ
ガク
ガク
人間として暮らせば忌み子として罵られ
妖怪としては弱くて生きられない
あの邪悪な人間の子なら尚更…

え？あの人間の子供じゃないですよ？
もじ
もじ
え？
あらやだ、私ったら勘違いしてた。
ポャ
ポャ
うふふふ
ってあの時は言ったけどよくよく考えればどちらも♀なような。
もん
もん
私と幽香さんの子供です
え
ぽ
ん
ねぇリグル
ゴゴゴゴゴ
怒らないから本当の事教えて
ひいいい
えっと、
単数倍数体と言って
ハチとかアリとか
染色体が単数でも生まれるのです。
♂
♀
おぎゃあー
よくわからん。
ですから
未受精卵でも生まれるんです～
カサ
カサ
いつもどおり、ホタルと言う設定は無視
虫だけに

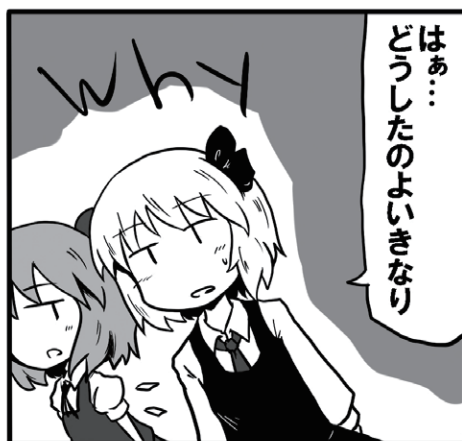
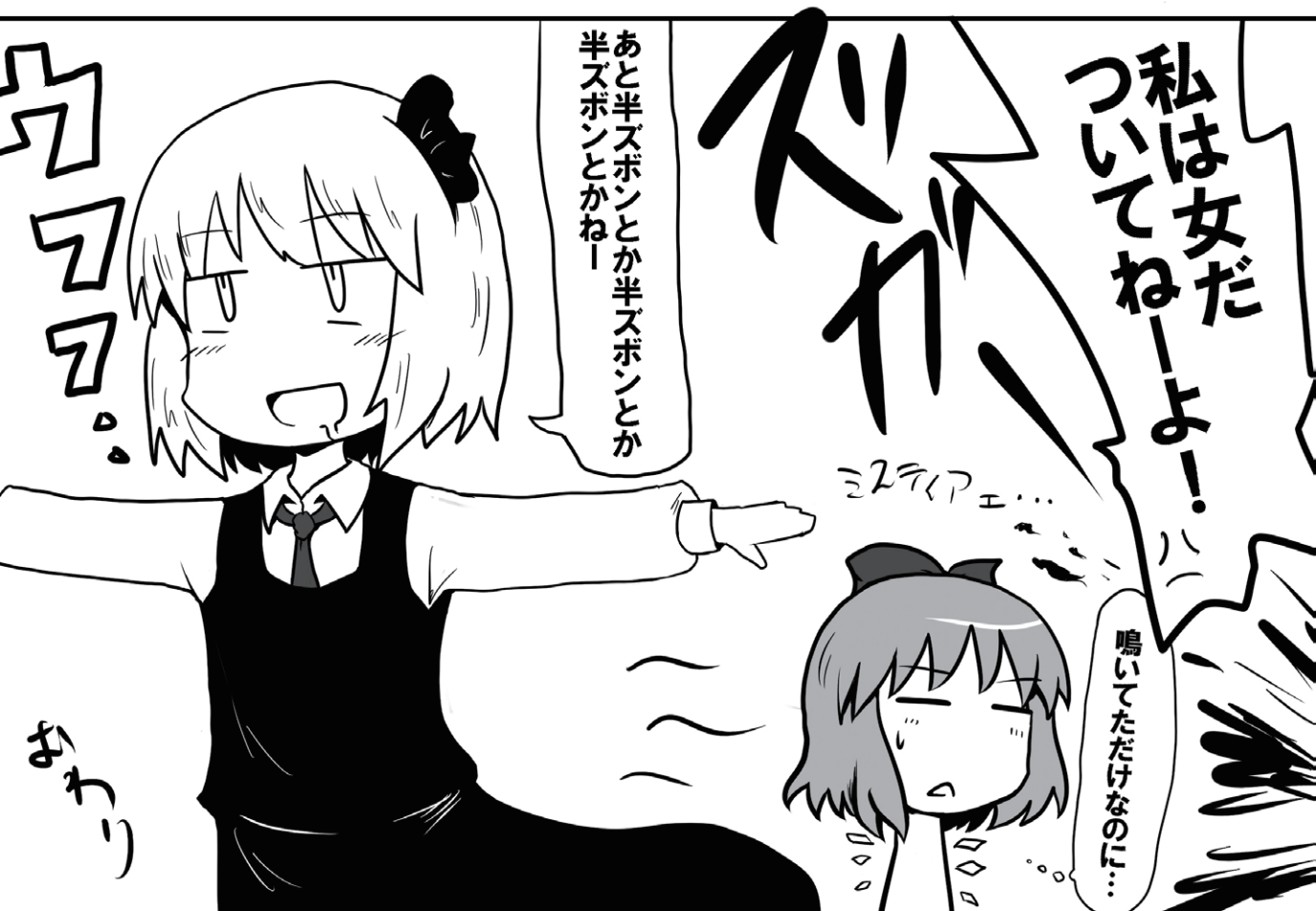
そんなこんなで
生まれました
ばばーーん
おぅ
命名
アグル2号
抱いてあげてください
ざっ
そり
こうかしら？
あた
ふた
だー
壊しそう
良くやったわ、リグル
感動
子供嫌いとかじゃなくてよかったー
じ～ん
クスリ
「私たち」の
子供ですよ
可愛い
さすがリグルの子供ね
デレ
デレ
ABO
お散歩にでも行きましょうか
フヨ
フヨ

幸せねぇ
太陽の光も
三人で浴びれば
三倍心地良いわね
寝顔も可愛いわね
すぴー
そういえば、幽香さん。
この後お花の受粉作業
一緒に…
うぎゃぁぁぁぁ
本当ですね
あら
どうしたの？

リグルー、アグルー
ご飯だよー
はぁい
モギュ
ボリ
モギュ
ゴリ
ガッ
ガッ
美味しそう
あれ？
アグルは？
ある程度大きくなったから
巣立ちましたよ
いただきます
そんなぁ
お別れもせずに…
大丈夫。
アグルは私のここで
生きてますから
そのセリフ
くさいわ
あはは
wriggle & Yuka
eat up a empty pie
×26

おまけーね
最大の愛情表現は捕食。

下品でゴメンナサイ。　↑ホタルです。

リグルが可愛くて生きるのが辛い
タイトル
私って…魅力ないのかな…
はぁ
描いた人
東
はぁ…どうしたのよいきなり
Why
いやいつまでも人気は上がらないし扱いはひどいからさ…なんか自信なくしちゃって
しょんぼり
んーまぁ私も同じようなもんだけどね
そーなのかーとか わはー呼ばわりだし
でもリグルにはいっぱい魅力があるじゃない
いつも一緒にいる私たちだからこそ知ってるのよ
ぐっ
今こそ世に知らしめるときのようね！
おう!!
ルーミア…チルノ…
てなわけでリグルの魅力をあげていくことになりました

1 強い
弱い…この程度か！
HAHAHA!
いやいやいやいやいy 1ボスの私がEXボスに勝てるわけないでしょ 明らかに捏造だし つーか何このイケメン
でもいつも「幽香さん後で勝負しようよ！」って言ってるじゃん
言ってない！
ボロ…
2 頭がいい
3+6=9
キリッ
いや全然頭いいこと言ってないよ！
何がキリッだ!!
3 カリスマがある
バリバリ最強NO．1
キリッ
どのへんがカリスマなのよ！しかもこれ右のコピペだし！
4 脱いだ すごい
そんなことはないよ！
スーパー
5 兵力が 3割増
大軍じゃなくて魅力ね！
6 なんか とにか すごい
うわぁ なげやり

7 え〜と…う〜ん…特になし

だらっ

うんまぁなんとなく予想してたけど…やっぱり私魅力ないのね

ぐすっ

ではミスティアさんに
発表してもらいましょう
どうぞー
ニヤ
ちんちん♪
♪
ピキッ
ビキッ
私は女だ
ついてねーよ！
ズガーン
ミスティアェ・・・
鳴いてただけなのに・・・
あと半ズボンとか半ズボンとか
半ズボンとかねー
ウァァァ。。
おわり

学園ナイトバグ

よく見たら電子葉巻!!

赤く光る

←煙は水蒸気

スッパーッ

健康的!

妬ましくない!!

※この漫画にリグルは出てきません

未来幽香

次元幽香

羅外

超幽香

再幽香

まったく……
配達屋に転職した
覚えはなかった
のだけれど
まぁまぁ
後で御礼は
必ずするから
自分で
わたしなさいよ
アリガトー

にゃーん
紫様！
大変です！

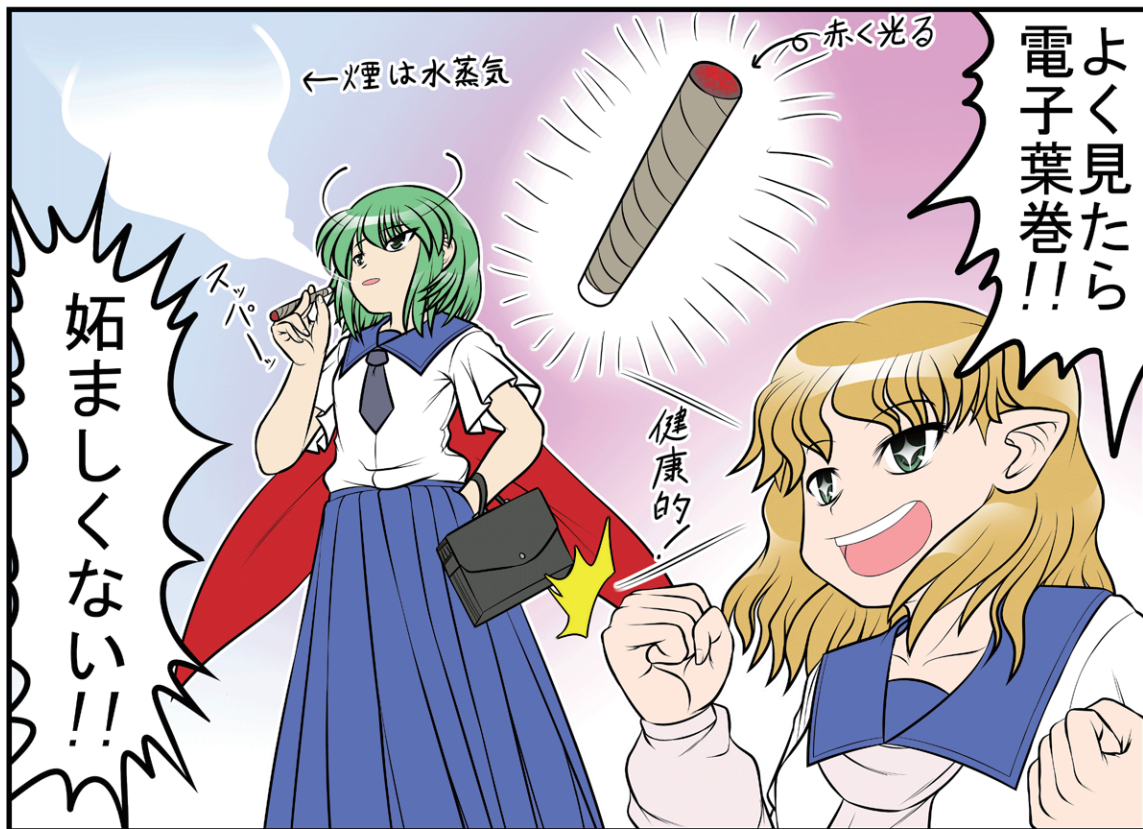
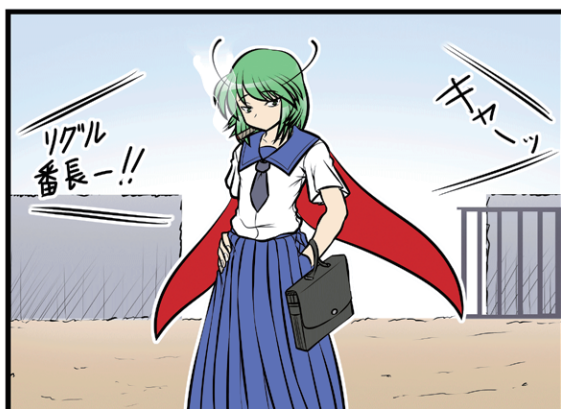
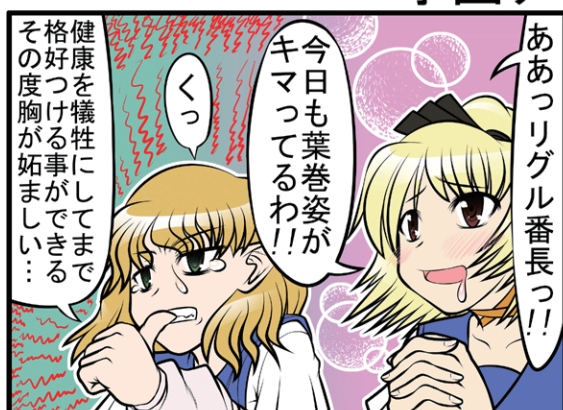
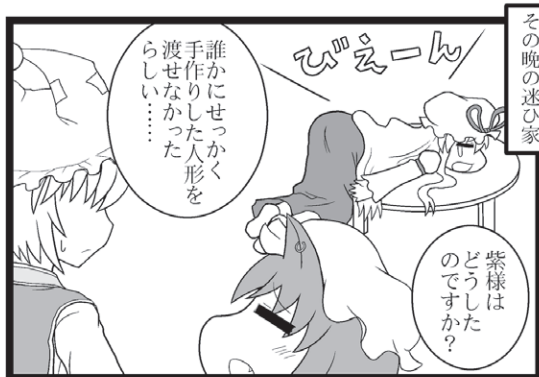
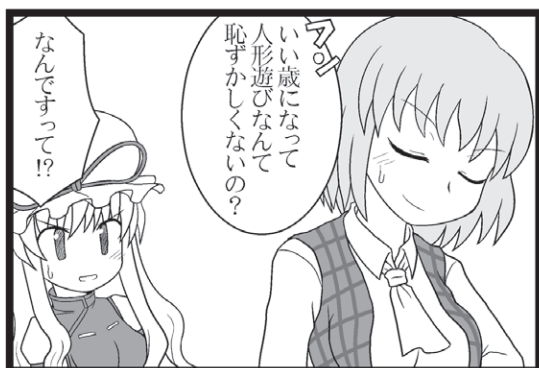
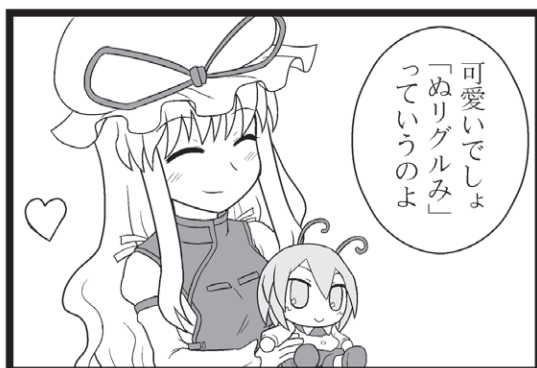
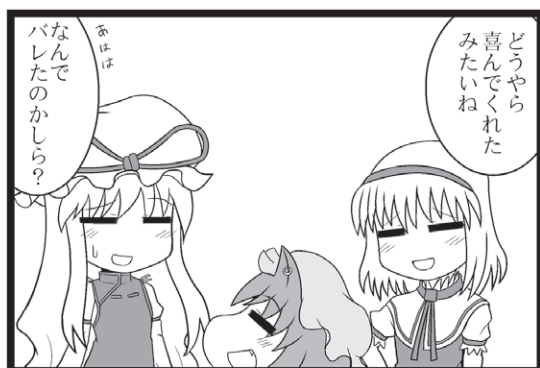
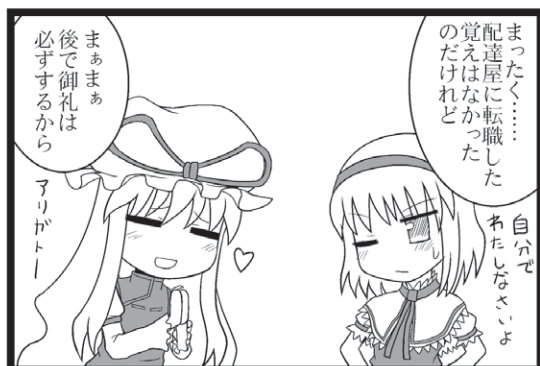
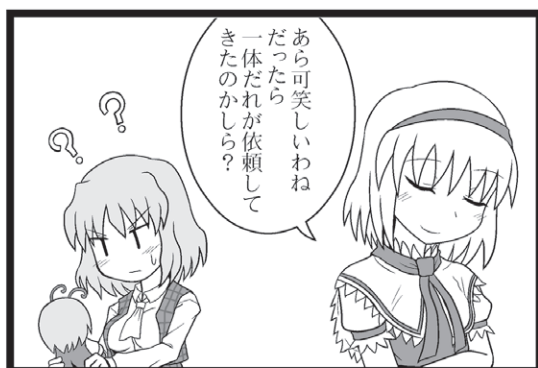
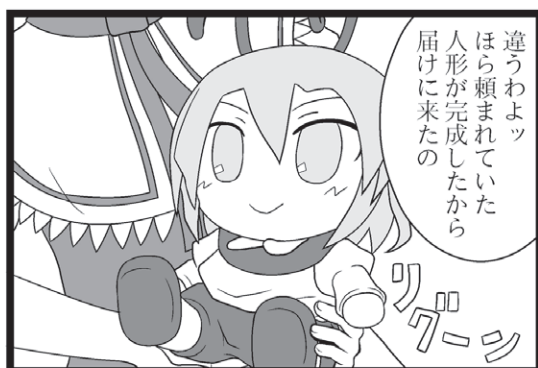
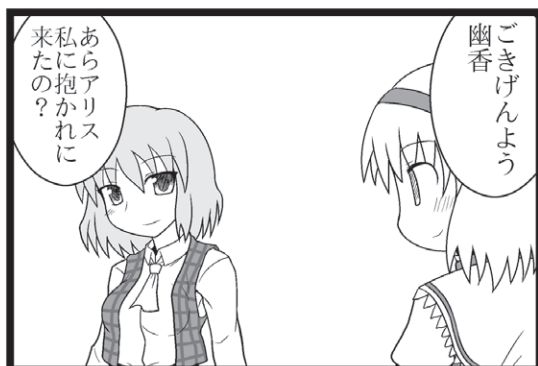
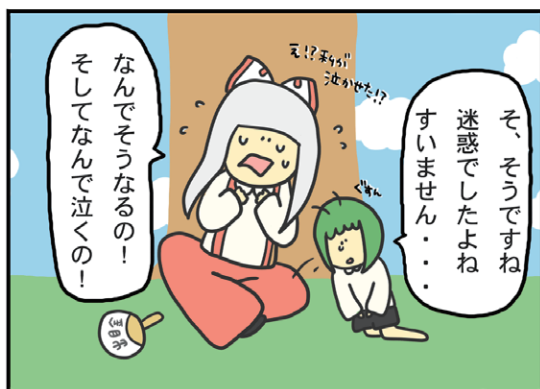
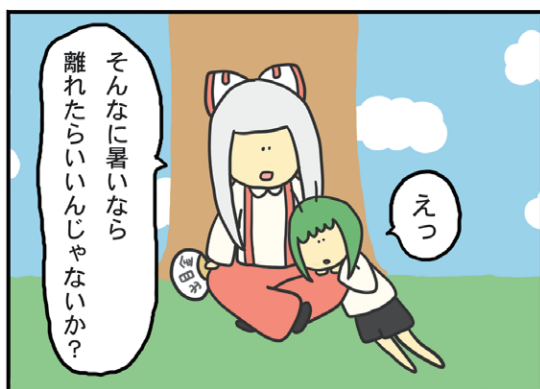
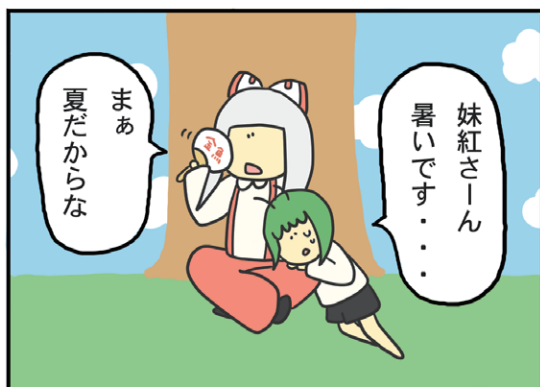
おうちのそとに
ひまわりが
いーっぱい
咲いてましたよ！
もって
きました!!

どうやら
喜んでくれた
みたいね
あはは
なんで
バレたのかしら？

ごきげんよう
幽香
あらアリス
私に抱かれに
来たの？

違うわよッ
ほら頼まれていた
人形が完成したから
届けに来たの
リグーン

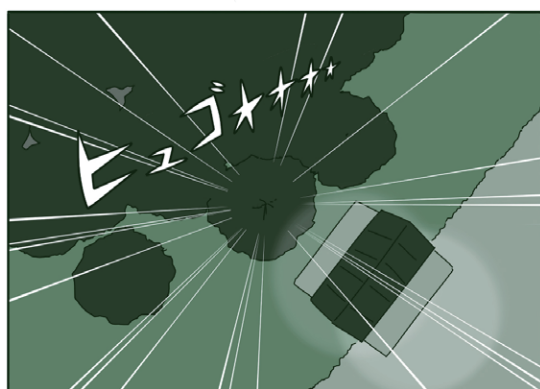
ぬリグルみ!?
でも私は頼んだ
覚えは無いわよ
ドキーン♡

あら可笑しいわね
だったら
一体だれが依頼して
きたのかしら？
？
？

間違ったこと言ってないのに・・・

リグルともこたん

描いた人:ぼこ

親方！空から○の子が！

リグルが帰ってきたのでつづく

リグルの過冷なる挑戦

描いた人：猫屋敷

VS 横井さん

情報の不通により、太平洋戦争終結から約28年もの間グアム島に残り隠遁生活を続けた元日本陸軍軍曹。帰国後に空港で発した第一声は有名であり、1972年の流行語として今に残る。

蟲カゴ

～ Compensation to fantasy ～

著者：悠奈

気がつけば、少女はただ独りで立っていた。どうしたらいいかわからず空を見る。その眼には満天の星空が映っていた。眼をつぶり暫くの思考、そして気付く。そうだ、自分の役割を果たさないと……

◆

「チルノ！違うんだ！チルノ！！」
　夜の森で少女の声が響き渡った。チルノと呼ばれた妖精は後ろも振り返らず走っていた。
「何が……何が違うんだよっ！裏切り者……！よくもみすちーを！来るなっ！お前なんて、お前なんて知らないっ！」
　声をあげた少女、蟲の妖怪リグル・ナイトバグは走るチルノをただただ見つめる。その眼には悲しみに溢れていた。
「なんで……なんでこんなことに……チルノぉ……ミスティアぁ……」
　目尻に涙を浮かべ、リグルは頭をたれる。リグルはチルノを追わなかったのではない、追えなかったのだ。リグルの腕には一人の少女が抱えられていた。幸せな表情をして寝息をたてず眠る少女が居た。その少女を抱きかかえていたからリグルは走ることが出来なかった。

◇

数刻前、幻想郷中の住民は妖怪、人間と種族を問わず神社で宴会を楽しんでいた。何時もと変わらない様子で皆楽しんでいた。唯一違和感があったのは、何時もなら進んで参加する八雲の者だけが見当たらなかったことだ。しかし、皆そんな事もある、と気にせず騒いでいた。リグルも皆と同様に騒ぎ、酔い潰れていた。
　そして、宴会は終了し、後始末は相変わらず巫女に（勝手に）任せ、各々の帰路についた。そしてその途中でリグルは突然目の前が真っ白に光るのを見た後、失神していた。この時、幻想郷の住民は皆気を失っていた。リグルが意識を取り戻したのはそれからしばらくしてからのことだった。
「あ、あれ？私どうしたんだろ？」
　リグルは周りを見渡す。見慣れた森の風景、どうやら自分が帰り道で倒れてしまっていたことに気がつく。
「う～ん……呑み過ぎた、かなぁ」
　リグルは首をかしげ、頭をコンコンと叩く。その時、リグルは全身に違和感を覚えだ。疑問に思いながらも、リグルは家に急いで戻るため、何時ものように空を飛ぼうと地を蹴った。しかし、その身体は重力に引き寄せられてしまい、地に足がつく。
（あれ？どうなって……）
　リグルが感じた違和感、それは身体にある妖怪としての力の調子がおかしいことだった。現にリグルは空を飛ぶことが出来なく

なっていた。次にリグルは己の能力で蟲を自分の周りに集めた。
「ええっと、これで、全部？」
リグルの周りに集まっていた蟲の数は昨日までとは遥かに少なかった。リグルは確証する。これはおかしい、と。
「一体、どうなって……っ！」
リグルが身体を抱え、地に膝をつく。リグルに吐き気に近い異常な感覚。身体の芯から感情の波が押し寄せてくる。それはまるで生物の本能のようにリグルの全身に行き渡る。
「な、に？これ？頭が……頭に何かが入ってくる」
地面に膝をついたまま今度は頭を押さえる。そこに流れてくる情報がだんだんと明確になり、痛みもひいてくる。
「これは……幻想郷？何なのこのノイズ、倒せって？何？きもちわるい……」
痛みが完全にひいてもリグルは頭を抱えていた。頭を抱え、そこに流れてくる情報を必死に理解しようとしていた。
「幻想郷のルール……？全住民が戦う？最後の一人を、決める……？」
頭に浮かぶ文字ともいえない声とも言えない奇妙な感覚を読み取る。それはまるで彼女の本能や性質そのものを誰かが書換えたような感覚。彼女は今、本能的に幻想郷中で争わないといけないという義務を感じていた。
感覚の解読が出来ても、彼女は理解出来ない。何故自分がこんな感情を抱いているのか、そして自分の身には一体何が起こってしまったのか。わからないことだらけだ。落ち着くため彼女は立ち上がり、思考を巡らせていると、不意に後方の草むらから葉の擦れる音が聞こえた。
「だ、誰！？」
リグルは急いで振り返る。そこには見慣れた知り合いの顔があった。
「あ、な、何だ。ミスティアかぁ。」
リグルの視線の先には、夜雀の妖怪、ミスティア・ローレライの姿があった。ミスティアとリグルは妖怪としては力が比較的弱い方ということもあって、仲の良いグループの一人だった。だから、気分的に不安定になっている今、リグルは知り合いに出会えて嬉しかったのだ。
「ねえ、ミスティア。ミスティアには何か変な事なかった？空が飛べなかったり、力が発揮できなかったり。」
リグルが話しかけるも、ミスティアはただ無言でリグルを見つめていた。その眼にはどこか決意めいたものが見えた。
「ねぇ、ミスティア？聞いてる……の？
リグルはそう言いながら凍りついた。草むらに隠れて見えなかったのだが、ミスティアのその手には何時も彼女が屋台で鰻を切るのに使っていた大振りの包丁が握られていたのだ。
「ミス……ティア？」
リグルが一歩下がる、それに合わせてミスティアが一歩近寄る。
「ね、ねぇ。どうしたのミスティア。そんなの持って……」
「リグル……」
ミスティアの口が小さく開き、小さく悲しげな声が漏れる。
「私、昨夜の帰り道で気を失って、気が付いたらとても変な感じがしたの。空は飛ぶことはできたけど、リグルの言ったように力がうまく使えなかった。でもその時に声が聞こえた……」
ミスティアはリグルの眼をまっすぐに見つめて続ける。
「幻想教の住民の皆を殺し、力を奪え、と。それが今の幻想郷を、皆を救う事になるから……と」
リグルがまた一歩下がると、ミスティアもまた一歩近寄る。
「私にもそんな声が聞こえた。でも、おかしくない？皆で争えって……そしてそれが幻想郷を救うって？そんな事信じられないよ！第一、なんでそんな声が聞こえるの！？そしてそれが私だけでなく、みすちーにまで聞こえてるの！？これはおかしいよ。異変だよ。そういう事は巫女に任せていたらいいじゃない！」
リグルが大声で一気に話す。ミスティアはそれに動じない。
「わかるの。これは義務よ。この地に済む住民皆に与えられた使命。なんとなくわかる

の。だから、リグル……他の誰かに魂を奪われる前に……」
　言い終わる前にミスティアは包丁を自分の前に持ち、リグルに向かって走った。
「ミ、ミスティア……」
　リグルには避ける暇がなかった。そして——
——

◇

　気がつけばリグルの腕の中でミスティアが眠っていた。その左胸には深々とミスティアの包丁が突き刺さっており、ミスティアの服を赤く染めている。リグルは腕の中のミスティアの顔を見つめる。安らかな寝顔。これで寝息をしていたらどれだけ幸せなことか……
　しかし、現実にはミスティアは息をしておらず、口から血が溢れている。
「わかんない……どうして、こんな……」
　その時前方の草むらから音がした。はっと、リグルが顔をあげるとそこには怯えた表情をしたチルノが立っていた。
「リグル……それは一体？」
　チルノが指をさしていたのはミスティアの死体だった。
「チ、チルノこれは、その……」
「リグル……どうして？どうしてみすちーを殺したの……？変な声が聞こえたから？だからみすちーを……」
「ちが——」
「何が違うのっ！」
　チルノの大声が森に響き渡る。
「あんたがみすちーを殺したんでしょ！この、この……おおばかやろう！」
「チルノッ！」
　リグルがチルノに向かって腕を伸ばす。チルノはそれを拒否するかのように一歩下がる。
「リグル……あんたはあたいが必ず倒す。強いやつらの力を奪って、もっと最強になってあたいがみすちーの敵を取る！」
　そう言うとチルノはリグルに背を向けて走っていた。その眼には涙が溢れていた。
「チルノ！違うんだ！チルノ！」
　夜の森にリグルの声が響き渡る。チルノは後ろを振り返らず、走りながら叫んだ。
「何が……何が違うんだよっ！裏切り者……！よくもみすちーを……！来るなっ！お前なんて、お前なんて知らないっ！」
　リグルは走るチルノをただただ見つめていた。その眼には悲しみに溢れていた。
「なんで……なんでこんなことに……チルノぉ……ミスティアぁ……」
　リグルは地面に座り込み涙する。と、その時ミスティアの身体が白い光に包まれていく。足から始まり、だんだんとその光は頭へと向かっていく。
「えっ！？」
　リグルが驚いている間にミスティアの全身は光に包まれてしまった。その次の瞬間、ミスティアの身体は白い小さな光の球へと変わった。
「何……？何が起きてるの……？」
　リグルは既に何も持っていない手を見つめ、指を開いたり閉じたりと動かす。特に変わった様子はない。ミスティアだった光の球はリグルの方へとゆっくり近づいてくる。そしてリグルにぶつかったと思うと、リグルの身体をすり抜け、リグルの体内に入っていき、消えた。
「ミスティア……」
　リグルは胸を押さえ座り込む。彼女には今、光が自分の中に入り、自分と同一化しているのが感じられていた。ミスティアと一つになっているのを感じていた。
「ああ、あああぁ」
　流れる涙を抑えられず、ただ少女は月明かりの下独り泣き続けた。
「どうして？なにが……何が幻想郷で起こっているの……？」
　かつてない大きく、異質な異変が起こった事を感じながら、少女はただただ泣くだけしかできなかった。

◆

　同刻竹林
「おい、冗談だろ？お前が死ぬわけない。眼ぇ覚ませよ。眼覚まして私を殺しにこいよ。お

いっ！」
　夜の竹林に二人の人の姿が見える。声を発した人はもう一人の胸ぐらを掴み、その身体を持ち上げ揺すっている。しかし、その身体は力なく揺れているだけだった。
「おい……こんな馬鹿な事があるか？どうしてお前が死ぬんだ。お前が死んだら私は何を生きがいに、誰を恨んで生きればいいんだ！？そして誰が私を殺してくれるんだっ！？」
　いくら話しかけても返事をしない様子に怒りと悲しみを感じ、死体を地面になげつけた。
「いくらお前が憎いからって、本当に死んじまったら私はもうお前を殺せないだろ……」
　四肢を地面につき、泣き崩れる。
「馬鹿野郎ーーーー！」
　静かな夜の竹林に一人の女の嘆きの声が響き渡った。

（つづく）

〈作者コメント〉
　連載に挑戦したいと思います。いきなり意味不明だと思いますが、よろしければ次回もお読みくださいませ。　みすちーと呼ばせるかミスティアと呼ばせるかに迷いました。

リグル・ナイトバグの災難

著者：夏樹　真

とある日の午後。

梅雨特有の大雨も午前中で止み、午後からはじめじめとした空気が残っているものの、空からはいくらかの日差しが差し込み始めていた。

稗田家の庭がどうやら活気付いている。どうやら干せなかった洗濯物を急いで干そうとしているらしい。女中達がわいわいと楽しそうな声を上げつつ洗濯物を抱えて障子の向こうを通り過ぎて行く。

そんな様子を耳にしつつ、少女は声を発する。

「二日ぶりの晴れですから、はしゃぐ気持ちもわかるのですけどもう少し静かに通ってほしいものですよねぇ」

「……そうだね」

全ての障子を締め切った部屋の中から聞こえた声が二つ。

片方は部屋の中央で小さな机で黙々と書物を書き連ねる少女から。もう一つはその少女の正面から聞こえてきた。

書物を書いている少女、稗田家の当主にして九代目である稗田阿求は正面にいる少女に特に目配せすることもなく、ただひたすらに書物を書き続けている。時々今のような会話は行われていたが、基本的にはお互い言葉を発することなくただ静寂を保ち続けているだけであった。

が、ついに限界が着たのか。阿求の正面にいる少女が声を荒げる。

「うん、というかいい加減にツッコミいれてもいいかな、ていうかいいよね！」

「……仕方ないですね。とりあえずは一段落まで書き上げたので聞いてあげますよ、リグルさん」

阿求はそっと筆を硯に置くと正面の少女、リグル・ナイトバグに視線を向ける。

小さいながらも立派に妖怪として人々にはそこそこ恐れられているはずの存在であるのだが。

そこにいた、リグルの姿は。

「なんで寝覚めからいきなりスキマ妖怪に拉致されてさ、しかもいきなり両手両足を縛られて稗田の屋敷に運び込まれたのか説明してほしいんだけど。ていうかこれいい加減外してよ微妙に痛いんだけどー！」

リグル自身が言うように、彼女は両手を後ろで縛られ足首も縛られて身動きが取れない格好になっていた。その姿はさながら、芋虫の様でもあった。

紐を外そうとしているのか、時々全身を動かすのだが、緑色の髪にあわせて頭の特徴的な触覚もゆらゆらと揺れていた。その動きが尚更芋虫を連想させて、阿求はクスリと笑った。

そのまま正座の姿勢から立ち上がると、リグルの元へと歩いていく。若干涙目になっているリグルの側まで来ると、屈みこんでその頭を撫でる。

「ごめんなさい、紫さんにとあることで協力

を頼んだのですけど乱暴にしてしまったみたいで。今ほどいてあげますので待っててくださいね」
「それでなんで私が拉致されたのかわかんないんだけど……あいたたた」
阿求はたどたどしい手つきでゆっくりと紐を緩めて行く。
やがて体が自由になれたリグルは体を起こすと、やれやれと呟きながら体をほぐすかのようにコキコキと動かす。縛られていた手首が痛むのか、手首を振るときに少し痛そうな顔をしている。
そんなリグルをどこか不思議な微笑で見つめながら阿求は今回の目的を語る。
「それでですね。今回、私が編集している幻想郷縁起に新しい項目を追加しようかと思いまして」
「新しい項目……？」
「えぇ。それでリグルさんに協力してもらおうと思いまして。ほら、リグルさんって実力はそこまでって感じですしその割には良識派というお話を聞きましたので、きっと協力してもらえると思いまして」
話しながら、どこか楽しそうに微笑む阿求。
一部に非常に引っかかる言葉があったが、そんな笑顔を見てリグルはなんだか照れくさくなる。どんなことに協力することになるのかは分からないが、求められるというのはそれほど悪い気はしない。この笑顔のために力になれるのならば、今までされてきたことともなんとか我慢できるというものである。
「なるほどね、それで私は何をしたらいいのってきゃっ！？」
リグルが笑顔で対応しようとした時。
いきなり阿求がニヤリと笑ったかと思うと、そのまま押し倒され上にのしかかられる体制となった。予想外の事態に、リグルは混乱し慌ててしまう。
その間をいい事に阿求は両手でリグルの手を押さえ、いつの間にか抵抗できないようにしていた。
「うふふ、ちょっと楽しいことを書き加えたいだけですよ？」
「嘘だ、楽しいとか絶対に嘘だー！」
突然の事態に慌てていたリグルだが、よくよく考えれば相手はただの人間、しかも少女である。いくら上に乗られているとはいえ、妖怪である自分がこれくらいで遅れをとるはずがない。
そう思うと、頭が冷静さを取り戻してくる。とりあえずは形成を逆転しようと全身にぐっと力を入れる。
入れた、のだが。
「あ、あれ……力が入らない……」
「あぁ、言い忘れていましたけど紫さんにお願いしてこの部屋には結界がはってありますす。妖怪はその力を著しく低下されるみたいですよ。あとこの中でいかなる音を立てたとしても、外には聞こえないようになっています。結界って便利なんですねぇ」
「な、なんだってー！？」
阿求の説明を聞き、リグルの顔から血の気引いていく。つまり、今の自分では上にのしかかっている阿求をどかすことはどう頑張っても不可能ということらしい。また、大きな声を出しても、それが外に届くことはない。
目の前に広がる、阿求の笑み。それがどうしようもなく、怖いものに思えてきた。
「まぁそういうわけで協力してもらいますね。なるべく抵抗しないほうが身の為ですよ？」
「いやだー、何する気なのーってちょ、ちょっとどこに手を！」
リグルの手を押さえていた阿求の手が片方離れたかと思うと、いきなりリグルの服の中に突っ込まれた。お腹を撫でられ、リグルの体がビクッと大きく震えた。
阿求の手がそのままお腹を伝い、胸元へと伸びていく。
「さぁ、楽しいことを調べましょうか♪」
「いぃーやぁーだぁーーー！」
リグルの叫びはただ、空しく部屋の中に響くだけなのであった。

――――数十分後。
部屋の中には、黒いマントで体を隠してシクシクと泣いているリグルと。

とある現実に打ち負かされ、がっくりと項垂れている阿求の姿があった。
「うぅ……もうお嫁にいけないぃ……」
「リグルさんに胸のサイズ負けてた……勝てると思ったのに……」
「ていうかスリーサイズ測るんなら先にそうだって言ってよぉ……」
そして、そんなやり取りをスキマから見ている影が一つ。
「……なんか悲惨ねぇ。やっぱりスリーサイズを載せるのはダメ出ししないとかしら」
それだけ呟くと、スキマの主は静かにスキマを閉じるのであった。

（終）

〈作者コメント〉
いつもながらの突貫工事でしたー。阿求とリグル……実際はどちの胸のほうが大きいのでしょうかね。個人的にはリグルだと思うのですが。どちらも好きなキャラなので好き勝手書きすぎた感じが否めませんが！

東方非想天則

リグル・ナイトバグ Story Mode 後編

著者：如月翔

流された悪戯迷宮　Ｓｔａｇｅ三　穢れた人形

夏も近付き、日差しは強く眩しいものになった。
天には働きすぎだと文句を言いたくなる程に眩しく光り輝く太陽が、
大地からは地面を明るく照らすだけでは飽き足らず反射した光線が、
熱の挟撃により思わず足取りは重くなりそうであるが、鈍くなった動きは格好の的となり暑さの追い打ちを受ける羽目になるだろう。
自然の恵みによる、そんな悪循環。
そんな中リグルは一人日陰に佇む。

――――迷いの竹林。

そう呼ばれるこの地は、名前の通り数えるのも億劫になる程の竹が自生し、まるで迷路のようだ、さらに空を竹の葉が覆い隠しているため昼でも少し薄暗い。
涼しいのは有り難いが、少しでも気を抜いて、進んでしまえば迷子になるような場所。
気付いたら、同じ場所をグルグルと堂々巡りすることも珍しくない。
その理由がイタズラ好きな妖精の仕業なのか、前後左右ほぼ同じように広がるこの竹林の形の仕業なのか、……別の誰かの仕業なのかは実際に体験してみないと分からない。

妖怪の山で神奈子から話を聞き、竹林を訪れたリグル。
左右を気にする必要はない、道なりに進んでも現在地が分からなくなってしまいそうなのに、わざわざ道を外すような真似はしない、下手したら本当の迷子になってしまう。
手がかりは無いか、と地面を見ながら進む内に埋め立てた跡、落とし穴を見つけた。
「こんなバレバレな落とし穴何て、今日日誰も引っかからないわよ」
辺りの悪戯だろうと考え一旦止まり、道の真ん中に作られた落とし穴を避けて歩き出す。
しかし、横を通り過ぎようと地面を踏みしめた次の瞬間――――。
いつの日か永遠亭で引っかかったような罠を踏み、片足にロープが巻き付き逆さまで吊り上げられる。
「……」
落とし穴には引っかからなかったが、とても悔しい……。
「楽しそうね、新しい遊びか何か？」
「楽しそうに見えるなら医者に見てもらった方がいいんじゃない？」
「いやいやその必要はないわ、私は生まれてこの方病気一つしていない健康マニアよ」
「んしょ……っと」
ぶら下がったままロープに弾を当て消し飛ばす。

そして着地して巻き付いたロープを解く。
「手際がいいわね、折角助けてあげようと思ったのに」
「ところで、何でこんな罠が隣同士にあるのよ……」
「ちゃんと周りを見なくちゃ駄目ね、あんなバレバレの罠今日日誰も引っかからないわよ」
「う……」
「まぁ、これでも食べて元気出しなさい」
丸いスイカの一部を手際よく三角形に切り取り渡す。
冷たくて美味しいスイカ、日陰とはいえ暑い今ありがたい。
「じゃあ私は用事があるからこれで」
白兎、因幡てゐはスイカを抱えて竹林の奥に消えていく。
お礼を言うのを忘れてしまったからまた会ったとき言おう。
そう思いスイカをまた口に運ぶ、甘い。
「……これ、どうしようかな」
汚れた手と食べかけのスイカを見つめ呟く。

ゴミを捨て、手を洗い再び竹林を歩く。
しかし手がかりになりそうな物は何も無い。
諦めて人里に行こうかと思ったその時、足元に再び嫌な予感が生まれる。
「何で……」
嫌な予感は的中するもので、いや良い事よりも記憶に残りやすいだけなのだが。
またしても同じ罠に引っかかり。
「うわぁぁぁぁぁぁぁ」
リグルは吊り上げられた。
「……高い」
今まで以上の高さに吊り上げられ少し驚き呆れるが、今まで通り抜け出そうと弾をぶつける。
ちょっとした音と煙が上がり目を閉じる、パラパラと粉塵が落ちていく。
「あ、あれ？」
落下が始まらず目を開けるとそこには、何時もなら吹き飛ぶはずのロープが涼しい顔をして変わらぬ姿で目に映る。
顔が何処にあるかは知らないが、更に数発当てても存在するロープに匙を投げた。
どうしようかとくるくる回りながら考える、しかしそんな状況で思考が纏まることなどなく、気持ち悪くなり力なくぶら下がる。
上から気配を感じ見上げる、いや吊り上げられ頭が下にあるので実際は下だが……見上げる。
一人の人間と視線がぶつかる、背の低い者にとって誰かを見下ろすのが滅多に無いため、珍しい経験をした。
「……新しい遊び？」
視線を交し合って十数秒、巫女以上吸血鬼以下に紅い人間——藤原妹紅が疑問を口にする。
確かに逃げもせずただ吊るされているその光景は、ワザと罠を踏み遊んでいるように見えないこともない。
「そう見える？」
「見えなくもないよ」
「助けてくれると嬉しいな」

「それで何をしていたんだ？」
「気になることがあって、ちょっと探し物をね」
「こんな暑い日にわざわざ探さなくてもいいでしょうに」
「昨日はこんなに暑くなかったけどね」
「昨日からか、ご苦労様」
「ずっとここに居たわけじゃないよ？」
「それくらい分かるよ、私も昨日はこの辺に居たんだから」
「貴方は何をしていたの？」
「私は探し……人だな、うん」
急に歯切れが悪くなる。
「実は、泥棒にあってね」
「あはは、盗まれるなんてまぬけね」
「……ほう？」
口から零れた言葉は、息をする間もあっという間もなく相手に届く。
撤回しようとしたが時既に遅し。
日陰になっており涼しいはずの竹林が、とても暑くなっていくように感じた。

「肝試しでもしようか」
「えっと、まだ夜まで時間あるし私一人って言うのも……」
「幾度もの生と死を重ねるヒノトリ、この弾幕にお嬢ちゃんの肝は耐えられる？」
自業自得とはいえ、一方的に話を進め、手の平に炎を生み出し放り投げる。
宙に浮かぶ炎は急激に燃え広がり姿形を鳥へと変化させた。
「――――！」
自身の数倍は優に超える程まで巨大化したヒノトリがリグルを呑み込もうと羽ばたく。
幸いにも一羽だけだったため避ける、そのまま地面に墜落したヒノトリは背後でパチパチと音を鳴らす。
当たれば痛いではすまない、背中に熱を感じつつ頬を辿る汗を拭う。
脳裏に浮かぶイメージは嫌なもの、実現するのも想像するのも嫌なもの。
自身が燃やされる、そのイメージを振り払おうと反撃にでる。
淡いが力強く光る緑色の弾を放つ、しかし妹紅はその場で腕を振りその軌道に炎を出し防ぐ。
炎の壁とでも言うのだろうか、簡単に防がれた光景を目の当たりにして焦る。
「これ位でそんな軽口を叩いていると、痛い目に会うよ」
消えかけた炎の壁は振り払われ、火の粉が地面に舞い散り光が消える。

歩き始めた妹紅に弾を放つが、炎に遮られ届かない。
攻めにも守りにも使えるのに、強いなんて反則だと思いつつ後ろに下がり。
ポケットに手を伸ばしカードを掴む、そしてそのまま突き付けるように取り出す。
その動作を見た妹紅は足を止め、身構える。
一度でも当たれば駄目というルール上、不老不死だろうが関係がない。
幾度となくカードを見せ合った間柄ならともかく、そうではない場合初見で避けきるのは難しく慎重に動かざるを得ない。
スペルカードと言う物は何度も何度も発動を繰り返し、試行錯誤の末作られる自分だけの一枚。
それは完成したとき普段放出する弾とは、比べものにならない程強い物として心に刻み込まれこの地に存在することになる。
【灯符「ファイヤフライフェノメノン」】
使役する蟲を四ヶ所に配置し、時計回りに水色と黄緑色の弾を撃ち出し円を形作る。
蟲からの青い弾が妹紅を狙い、円からは雨のよう周囲に弾が降り注ぐ。
リグルはその様を見届け、炎を破るように願う。
妹紅はヒノトリを再び生み出す、弾をその身で受け止めてもなお翼を広げ飛翔するその姿はモチーフの不死鳥であった。
「あ……」
スペルを物ともせずに受け続けたヒノトリが

発動者のリグルを捉える。
負けた……、炎だし痛いんだろうなあ……、永遠亭に薬を貰いに行かなきゃ……。
配置した蟲を下がらせ、目を瞑りそんなことを思う。
響き渡る轟音に思わず耳を塞ぎ、風圧を体で受け止める。
つい最近感じた振動と音を身に受けるが、それ以外に何とも無いため目を開ける。
「え？」
「……」
何処から現れたか御柱にヒノトリが押し潰されていた。
妹紅は黙ったままリグルと御柱の下敷きになった消えそうな炎を見つめる。
そしてお守りから聞き覚えのある声が響く。
「(貴方の諦めない姿勢は、私は評価しています)」
「え……？何で？」
「……山の神様がどうしてこんな所に？」
「(――――口は災いの元と言いますが、少し思うことがありまして)」
声だけではなく姿を現わす。
「それにこの子とは、ちょっとした縁がありまして」
「それで、貴方が変わりに相手をするの？」
「いいえ、私が直接手を出すのはこれが最後です」
「？」

妹紅はともかく、リグルも現状についていけなかった。
負けて終わりかと思ったら、いきなり現れた御柱がヒノトリを地面に叩きつけている光景。
庇われた理由もよくわからないままだが話は進む。
「（さて、鬼ごっこと行きましょうか、走りますよ）」
「え？は、はい」
神奈子は、妹紅の視界を御柱で奪うように落下させ、リグルを連れて走りだす。
進む先は竹が行く手を幅むよう生える獣道、竹をかわして走る。
暫くして御柱は消えるが、妹紅一人が取り残された。
「え……、私が鬼？」

歩道から外れた茂みに身を隠す二人がいた。
その内一人は呼吸を整えながら、息を潜め会話を交わす。
「あの、色々聞きたいことがありますけど、どうやってここに？」
「（以前……、一風変わった玉や人形の話を聞きまして、そのお守りにも少し手を加えてみたのです）」
間欠泉によって怨霊が地上に現れたとき、賢者によって生み出された技術。
真似してみようと色々弄ってみたら会話どころか、行き来すら可能になった。
「そうなんですか」
「（えぇ、ただ不安定なので何時出来なくなるかは……と、それは置いておきましょう）」
「？」
「（まずは、あの人間を倒しましょうか）」
リグルはその言葉に頷く。

自分以外誰もいない様に静かな竹林を歩く人間。
余りにも静かなその光景は悪戯好きな妖精や、楽観的な兎がいないからであった。
理由は一つその人間が纏う雰囲気であった。
周囲の気配を探るよう、神経を細く鋭い針の如く尖らせて進んでいるからだ。
触らぬ神に祟りなし、誰一人として歩道を歩こうとするものはいない。
「……はぁ、これ疲れるんだよね」
纏っていた近寄りがたい雰囲気を捨て、肩を回しながら竹を背に座り込む。
目の前から逃亡したリグルと神奈子を追ってきたのはいいが、一向に見つからない。
「もしかして騙されたかな？」
逃げ出したのは勝負を捨てるためで、鬼ごっことというのは嘘だったかもしれないと考えられる。
しかし、どこかの兎でもないあの二人が嘘を言うようにも思えない。
ただ一人でウロウロしているところを見られたくはない、天狗は勿論この竹林には見られたくないのが数人……、
もし見られたらどんな風に誂われるか……、
面白くないことが待っているのが手に取るように分かる、妹紅は立ち上がり背伸びをし、歩き出す。
「そりゃあ、確かに大人気なかったかもしれないけど、だからってこんなに逃げなくてもいいよね」
ついつい愚痴が零れる、肩を落としながらこれからどうしようかと思った瞬間、見覚えのある弾が飛来する。
回避と防御を行い弾幕の来た方向を見つめ、溜め息をつき御札を取り出す。
「（まず一つ）」
「……本当だ」
時間稼ぎをしている間にリグルは神奈子から指南を受けた、その一つが竹の隙間から攻撃するということ。
妹紅のヒノトリは大きく派手であるが、それは狭く入り組んだ場所では障害物に遮られ効果が無くなる。
所構わず炎を放ち、竹林を全焼させるような性格ではない、何か別の攻撃手段に切り替えると予測した結果だがその予想は的中した。
「（御札を使うとは思いませんでしたが……）」
「どうかしましたか？」
「（いえ、なんでもありません。さぁ向こうもやる気です行きますよ）」
「はい」

広い竹林の一部がボロボロになっていた、ところどころにヒビ割れや焦げた跡が見え御札が張り付いている。
歩道と茂みに別れて行われていた弾幕ごっこは、傷跡を奥へと伸ばし互いが茂みに入った状態で続いていた。
両者に決定打がない攻防を終わらせようと茂みに入り込んだ妹紅であったが、リグルは更に奥へと進む。
誘われていると思いつつも追いかける。
「(さて、これで二つ。目を離さないように集中して、準備はいいですね?)」
リグルは一定の距離を取りつつ、用意していた使い魔と共に前後左右からありったけの弾をばらまく。
妹紅も反撃をし、互いに竹や御札、弾を利用して防ぎ、避ける。
「――――!?」
そんな中、頭上を覆う竹の隙間から注がれる少量の日差しを影が一瞬通り抜ける。
その一瞬を見逃さなかった妹紅は炎を周囲に広げ空を見上げ、既にスペルを発動させたリグルと視線を交わす。
妹紅もスペルを発動させ迎え撃つ。
「長い鬼ごっこは、鬼の勝ちで終わりだよ!」
「いや、貴方の負けで終わりよ!」

【蝶符「バタフライストーム」】

【不滅「フェニックスの尾」】

互いのスペルがぶつかり合い、炎と光が互いのエネルギーを削る。
その様子を眺めながら妹紅は、リグルが何故今更こんな捨て身の戦法を取るのか考えていた。
手が尽きた訳ではないだろうし、少なくともここに誘き寄せようとしていたはずだ。
周囲に神奈子の姿は見えないが、時間稼ぎをしている間に何かしら策を授けた筈……。
何を企んでいる……、最後の最後で無策に突っ込むのを指示するとは考えづらい。

――――スペルブレイク――――

「なっ!?」
互いのスペルが一歩も引かずに消滅し合うという、予想外の結末に妹紅は驚きを隠せない。
空を見上げていた妹紅は、リグルがいないことに気づき周囲を見渡す。
前後左右の何処にもいない……、もう一度空を見上げようとした時背後で足音が鳴る。
振り返るが視界に映るのは果てまで続くような竹林ではなく闇のような黒一色。
急に現れた黒が思考を乗っ取るのは一瞬だった、直ぐにそれがリグルの身につけていたマントだと気付き叩き落す。
しかし、叩き落すと同時に目の前に迫るリグルに妹紅はただ直撃する、妹紅を混乱させ動きを止めるには十分だった。

「うわっ……」

弾幕ではなく、タックルだが……。
「あー、負けた負けた」
「見事でしたよ、機会があればお手合わせ願いたいものです」
「はは、私でよければお手柔らかに」
「手を抜く余裕があるとは思えませんが?」
「そんな謙遜……いらないとリグルも思わない?」
「二人とも強いですし……」
「勝っておいてよく言うよ、まぁ機会があった時はその時で」
「ええ、楽しみに待っていますよ」
「じゃあ私は用事もあるし失礼するよ」
「用事ですか?」
「ちょっと悪戯が過ぎる兎を懲らしめにね、そっちも何かあるの?」
「私は大きな人影探しの途中で……」
「もしかして里の……」
「えぇ、でもそれ以上は内緒ですよ。楽しみが減ってしまいますから」
「?」
「なるほどなるほど、面白いものが見れるから期待しているといいよ」

「はぁ……」
会話に付いて行けずにリグルは首を傾げる。
その様子を見て笑いあう神奈子と妹紅。
妹紅と別れリグル達は人里に向かった。

人妖が共存する聖域　Ｓｔａｇｅ四　天を覆う者達

「里にあんな大きいものがあるんですか？」
「常にあるわけではありませんが、そういった能力を持つ妖怪がいるのです」
人里を歩きながら人影についての話を聞く、ただ神奈子は今姿を出していないため、傍目にはリグルが一人で会話をしているようにしか見えないが。
「少し調子が悪くなってきましたね」
お守りからの声に雑音が入り始めた。
「少し聞こえ辛いです」
「まだまだ未完成の物ですから、我慢してください」
「はぁ、……何ですかねあの人混みは？」
子供達が雲と青いフードを被り、金色の輪を持った二人組を中心に一ヶ所に集まり、騒いでいる。
雲山と雲居一輪、先の異変が終わった後で新たに人里に迎え入れられ居を構えた者たち。
二人は里で子供達を相手に入道屋を営んでいる、……知らないものからすれば子供達から人気のある近所のお姉さんだが。
「さぁ、雲山行くわよ」
雲山と呼ばれた入道はたちまち形を変え、空を覆わん限りに広がった。
大きさや形を自由自在に変えられる、雲ならではのユニークな能力を持っている。
「……でか」
「――――」
リグルに気づいた雲山は言葉を発しないまま視線を向ける。
「……」
「――――」
「……怖！」
「（リグル……第一声がそれですか）」
思わず発した言葉に、お守りから呆れた声が発せられる。
雲山は無言のまま小さくなり、先程までとは打って変わって今にも消えてしまいそうになる。
その様子を見て子供達は各々文句を言う、一輪は子供達を宥めながらも黙って見過ごすわけにもいかず、子供達の集団から抜けリグルの元に向かう。
「ちょっと貴方、雲山に何てこと言……」
問い詰めようとした一輪がリグルの姿を見て止まる。
その目はリグルではなく、触覚を映していた。
「――――」
「だ、大丈夫蟲とはいえ……」
「（……）」
リグルにも神奈子にも聞こえないように小さな声で会話をする。
神奈子はその様子を見て気づいたようだが、リグルは気づいていない。
「――――」
「心配はいらないわ、そんなことよりも貴方の方がよっぽど大事」
「あの、さっきから何を？」
「何でも無いわ、貴方が雲山に変なこと言わなければ良かっただけのこと。着いてきなさい勝負よ！」
「（彼女は貴方と相性がいいかもしれませんね……）」
「え？」

【拳骨「天空鉄槌落とし」】
地上から離れ、空に浮かびながらスペルを発動させる。
小さくなっていた雲山は拳だけを何倍も大きくなし、姿を見せないまま拳を振るう。
頭上から振り落とされる拳を避ける、拳が空手で通り過ぎる度に振動が起き、弾が数を増やし降り注ぐ。
その様子を視界に捉え、避けつつも負けずに撃ち返す。
「（これは苦戦しそうですね）」
「強い、です……」
使用する力であれば神奈子や妹紅には及ばず、にとりとそれほど大差があるわけでもな

いが、リグルと比べたら余程強い。
自分を狙い続ける大きな拳と後を応用に降り注ぐ弾の組み合わせに阻まれ近付けず、放つ弾は音をたてながら打ち消し合う。
ところでこの拳を形取る雲は硬いのだろうか？
空に浮かぶ雲は柔らかそうだが、この雲は当たると痛いのだろうか、痛くないのだろうか？
見た目からすれば硬そうであるが……。
「よそ見するなんて随分余裕ね」
「(目を離していると、あっという間に追い詰められますよ)」

【拳打「げんこつスマッシュ」】

今まで交互に振り落とされていた拳が同時に現れ、リグルを挟み込むように左右から動く。
重く鈍い音を鳴らし振動を与えながら拳同士がぶつかり消える。そして避けたリグルを追いかけまた左右に現れる。
「(雲ですが、当たれば――――)」
「え？神奈子さん？」
「(あ――――切れ――――ない)」
「あの、よく聞こえな」
「(最――蟲――手――――)」
お守りからはそれ以上何も聞こえなかった。
雲山と一輪はいぶかしみながら動きを止める。
今まで弾幕ごっこをしていたのが嘘のように、静かな空気が互いの間を流れる……。
「……えっと続きをしてもいいのかしら？」
「大丈夫です……」
遠慮しがちに聞かれても、待って欲しいと言えるわけもなく、神奈子との会話が途切れたまま再び拳が動き出す。
頭上に先ほどまでと同じ弾が集まる、拳がぶつかる度に数を増やし、器の限界を越え、溢れ出る水のように降り注いだ。
拳から一気に距離を離し弾幕をくぐり抜け、飛来した拳をグレイズしつつもギリギリで避ける。
見るものに不安を抱かせ心配させるような危ない避け方、正直二度と今の避け方は出来ないだろう、やろうとする度胸もリグルにはないが。
成功したことに自分自身で驚き喜びつつも平静を装い、神奈子が最後に伝えようとした蟲という言葉について考える。
「何て無茶苦茶な……」
「私もそう思う、けどこれくらいじゃまだ足りない」
『皆おいで』
虫を呼ぶ。
神奈子と連絡が取れない以上、普段通り自分の持つ力で戦うしかない。
そして、リグルの持つ力といえば虫を操ること。
神奈子が何を伝えようとしたか理解してないが、蟲を使うということに辿り着く。
言葉を交わして意思疎通をし、力を借りて力を貸す関係。
そんな関係であるため呼ばれた虫は、何処にいようが姿を現し地上からゆっくりと近付く。
「もっと破天荒なことをするのかしら？」
「かもしれない」
「……？」
虫が嫌い、もしくは苦手そんなリグルのためにあるような弱点を神奈子に知られたのが運の尽き。
正確に言葉を伝えることは出来なかったが、リグルは答えに辿り着く。
地面から浮上する虫の動きに、雲山が気付き一輪に寄るが既に遅い。
「どうかしたの雲山？」
下から迫る異変に気付かず、雲山に話しかける。
どういう会話をしたのかわからないが、一輪は慌てて下を見る、そして白い肌を青くし、表情はひきつらせリグルを見る。
その顔は今すぐやめさせるよう必死に訴えかけていた。
「ま、待って」
「勝負に待っては無しよ！」
「っく、雲山！」

【時代親】

スペルを握り唱えようとした一輪は声を止め、震えだす。
「いやあああああああああ！」
耳が痛くなる叫びを上げ、スペルを投げ捨てる。
捨てられたスペルは虫が張り付いたまま落下していく。
「まだ続ける？」
「……」
「あ！？」
一輪は黙ったまま落下しかけるが、直ぐ様雲山に支えられる。
「あの、ごめんなさい」
「――――」
「まさか、気絶するなんて思わなかったんです」
「――――」
地面に戻りながら謝る。
雲山が何を言おうとしているか分からなかったが……。
謝らなくてはいけない気がした。
「あのっ」
足を着けもう一度謝ろうとするリグル、しかしそれを待っていたのは一輪でも雲山でもなく、
怖いくらい満面の笑みを浮かべる上白沢慧音だった。
ゆっくりとしゃがみ、目線を合わせて肩を掴む。
「何か弁解はないか？」
「ごめんなぁっ！？」
謝ろうと頭を下げたリグルにカウンターで頭突きを叩き込んだ慧音。
「謝ってすむなら、ルールなんてない！」
薄れる意識の中リグルはズルい……と毒づいた。

「さて、纏めると今回は互いの後先考えない行動によるものってところか。」
「はい……」
寺子屋で正座をしつつ、注意を受ける。
黒板に書かれた文字を見ながら、問答するさまはまるで授業のように見えた。
「まぁ幸い、里に被害はないし初犯というわけだから大目に見るが、今後は例え飛びながらだとしても外でやること」
「はい……」
「分かりました、雲山共々気を付けます」
「分かってくれればいいさ、もっと大事になっていたら私だけじゃなかっただろうし」
「変なこと言って、ごめんなさい」
「こっちこそ、頭に血が昇ってまともな対応が出来なかったわ、ごめんなさい」
「さて、じゃあお開きにしよう」
文字を消し出口に向かう慧音、立ち上がり後に続く一輪と雲山、そして動かないリグル。
立っていた慧音、普段から正座をし、ある程度慣れている一輪、浮いている雲山、そして真面目に正座をしていたリグル。
何が起きたのか、慣れない物が正座をすれば起きる現象はただ一つ。
「……リグル、どうかしたのか？」
「――――」
「もしかして……」
「あ、足が痺れて動けないです……」
その後一輪に抱えられて寺子屋から出た一向は、リグルの足から痺れが無くなるまで会話を交わし、それから各々の帰る場所に向かうため別れる。
暫くしてから飛べば良かったことに全員がほぼ同時に気付く。

（終）

〈作者コメント〉
　個人的に非想天則に出てほしかった人妖を選びましたが、対戦相手が厳しかった気がします。格闘やらせたら神奈子様で満身創痍になりますし、弾幕ごっこと言っても……、ただ当てれば勝ちという表現が口説かったかもしれません。

STAR
8月号テーマ
『夏祭り』
『すたあまいん』　怒羅悪
こんばんわ、どらおです。
実は最初勘違いして、
雪祭りネタで４コマ書いてたのは秘密です。
イラストの元ネタはわかる人はわかるかと・・・w
では、失礼しました。

『 宜しい。ならば山笠だ 』　斑

「今月の方がある意味挑戦だよね」と言われたけど僕子供だから良く解らない。
ところで幻想郷での山笠は男子禁制らしいですよ。

『 無題 』　ADDA

釣りスキルレベルUP！

『 帰り道 』　蛍光流動

明日からまたケの日

クロック

わは――

リグルなのかー？

ルーミア！

リグルは夏祭りに行かないのかー？

どうせ私は虫だからね…

人間は毎年いろんなトラップで私を近づけさせないんだ

そーなのかー？

私を惑わす青白い光……

ローソンとかにある**あのパチパチ**にはじまり……

あげく…

サラテクト常備完全結界状態で……

聞いてねえしっ

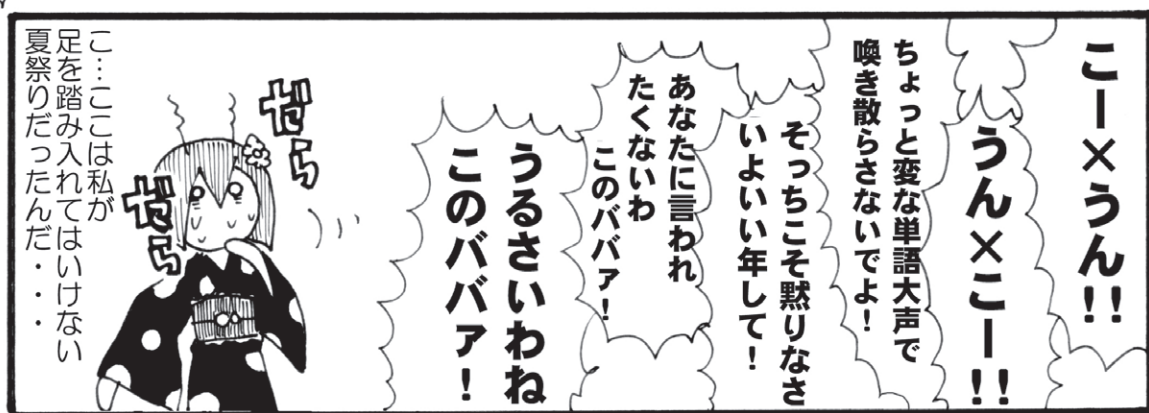
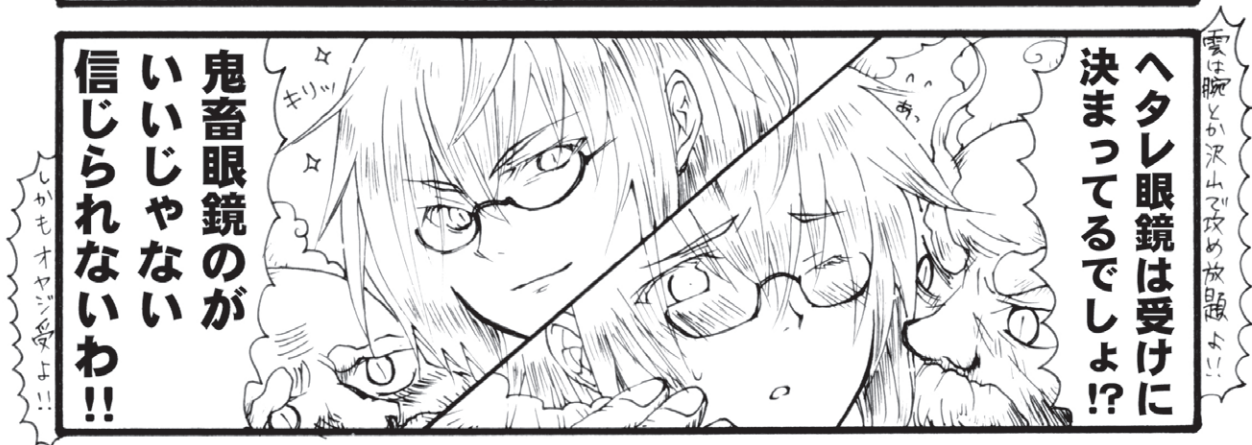
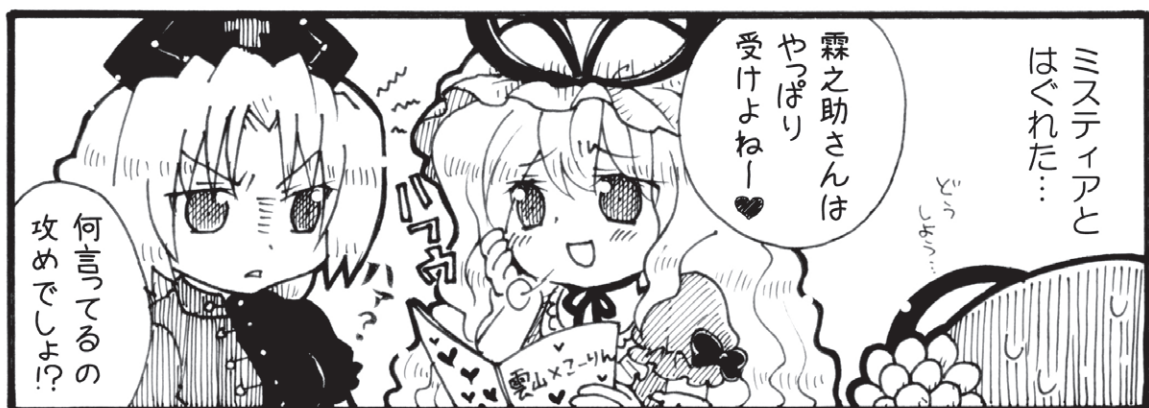
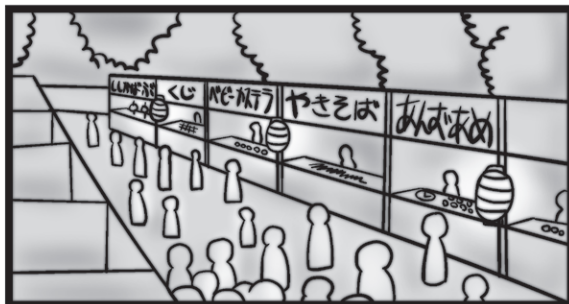
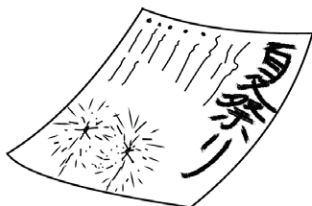
…はぁ、もう
ここにいても仕方ないし
巣にかえ………
後頭部にかつてない激痛!!
おや?あたったの?
ごめん〜〜ちょっと
虫の居所が悪かったというか
虫の居た所が悪かったというか…
うまいこと言ったつもりかっっ!!
ガサ ガサ
あんたもお祭りいけないこ?
わたしもっ!
わたしもっ!
キャッキャッ
このこ…
たしか紅魔館の
……誰だっけ…
あ、よく見たらナイトキャップがオムツだ…
あくしゅ あくしゅ
バキゴシュメキャグチャチャ
えっ
えええええ?
あなた何者!!
私が節足動物じゃなきゃ大変なことになっていた…
すべてのはかいしゃ
ディケイドッ!?
わたちすぐいろいろこわしちゃうから
お姉さまがお祭りにいっちゃいけないって
だからサクっとぶっこわしてここまできたの
ぴちゅーん
でもねっ わたち なんもかんも壊すわけじゃないんだよっ
ここにくるまでだれの息の根もとめなかったしっ
そ…
そう…
わたちったらかりすまねっつー
誰かみたいなこと言うね…
はっくしょん
ズゴゴゴゴゴ
痛い
そのくしゃみすっごい痛い

私が甲殻類じゃなきゃ確実に死んでたよっ！
カサカサカサ
ちー
こんな危ないコ相手にしてられないいっ！
ねえ、あんたもいっしょにお祭りいこうよう
冗談じゃないいっ残機がいくつあっても足りないよっっ!!
触覚まいて逃げるっっっ!!
ドッ
まってよう（×4）
ヒィーッ増えた！
どうしてあんたはお祭りにいかないの？
ずらっ
まってよう
叩き落とすんじゃないよっっ
いっしょにお祭りいこうよう
お祭りなんか行きたくないっ
だから私は
虫の耳にサンホラ
どういう意味だっ!!
本当は私だってお祭りに行きたいよ……
でも、やっぱり嫌われてるの分かるからさ……
もう私にかまわないでよっっ!!
お前も夏祭りも大ッッキライだっ!!
げっぷでそう…（×4）
マイプロエェェェェ
やめてこの構図きっと痛いからやめて
ドッ
パォン

ドォーン
パーン

あれなあに？
ドン
……しらない……
あんな弾幕みたことないよ
ドォ
……
……きれいだね…
パラパラ
……ごめんね……
えっと…
ドォーーン
ドォン
ふらんだよ
こっちおいでよ

ねえ、つぎのお祭りもいっしょにあれ見ようよ
はは私それまで生きてるかなぁ…
リグルもきゅうけつきになれば大丈夫だよ
メシッ
ゴキゴキ
フラン、私モスキートじゃないからさ…

夏の祭りと言えば
貴キ
明日一緒に夏祭り行きましょ！
人が沢山来るから変にめかし込まずに動き易い格好で来てね！
―って言ってたけど大袈裟よねー
浴衣なんて着てみたり…
お祭りだし
あーもー何珍しい格好してるの！
可愛いけど…
大丈夫だよ…って
ひえぇ⁉
何この人…⁉
わらわら
だから言ったのに〜
幽々子様ー「南無三堂」新刊一限だそうです…
ご友人様の分が…
え、私と半霊で1冊ずつ…ですか
そうですね！分かりました！
すた
すた
ちぇええええええええええん〜
らんしゃま…
パシャ
パシャ
パシャパシャ
パシャ
視線こっちお願いしまぁーすっ!!
ちょっとあんた何やってるの!!
頼んだ所全部回ってきたの⁉
ゆっ紫様すみません！橙の可愛さに思わず…っ
あぁっすみませぇ〜
ギャ
な…なつまつり…⁉

ミスティアとはぐれた…
どうしよう…
霖之助さんはやっぱり受けよねー♥
リフウ
ハァ？
何言ってるの攻めでしょ!?
雲山×こーりん

雲は腕とか沈山で攻め放題よ!!
ヘタレ眼鏡は受けに決まってるでしょ!?
あっ
キリッ

鬼畜眼鏡のがいいじゃないい信じられないわ!!
しかもオヤジ受よ!!

こー×うん!!
うん×こー!!
ちょっと変な単語大声で喚き散らさないでよ!
そっちこそ黙りなさいよいい年して!
あなたに言われたくないわこのババア!
うるさいわねこのババア!
ざら
ざら
こ…ここは私が足を踏み入れてはいけない夏祭りだったんだ・・・

帰りたい…!
お目当ても買えたし帰ろーっと!
ほくほく
リグル本国ゴールド
忘れてる→
助けてミスティア…
終。

すいません…

リグると!
夏祭り珍騒団!

みんな、集まったかー?
よーし、じゃあ点呼!

くじ
ベビーカステラ
やきそば
あんずあめ

夜雀見参!
ナイトバグリフトオフ!
氷精参じょ
えっ、あ…
真打ち登場~!

まずは私が軍資金を集める!
みんなは会場を偵察しといて!
あとチルノ泣き止ませて
あとルーミア押さえといて

他人のプレイみて遊んだつもり
ゲーセンにいる貧乏学生かッ!
にとり

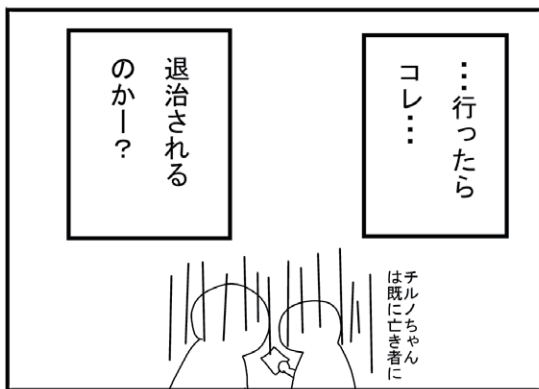
いかん元締めにバレた!
わー
みんな全力で逃げろ~!
幸運

ひどぅん

りぐるみゃの屋台巡り

ペンタブ壊れた人、豆板醤描いた

ボクの季節…

みすちーも出張で出す
みたい。リグル達も来
てね。場所は
博麗神社だぞ！

…行ったら
コレ…

退治される
のかー？

チルノちゃん
は既に亡き者に

注意

これ以後、下書きなので随分汚い事になってます
ワケは聞かないでくれた方がありがたいデス。

グレイズおいしいです

チルノの屋台に行きました

よくきた！

早速食べて行ってね！

わぁい！

わぁい！

おいしs…

カリカリカリカリ

さっきからグレイズ音が…

アイシクルフォール削って作った！

ピチュらせる気か？

ピチューン

焼き鳥屋

妹紅さん！

リグル！来てくれたのか

妹紅さんも屋台出してたんですね

あぁ！焼き鳥屋をやっている！ぜひ食べていってくれ！

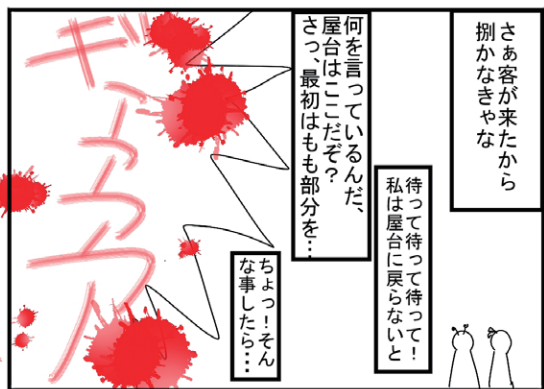
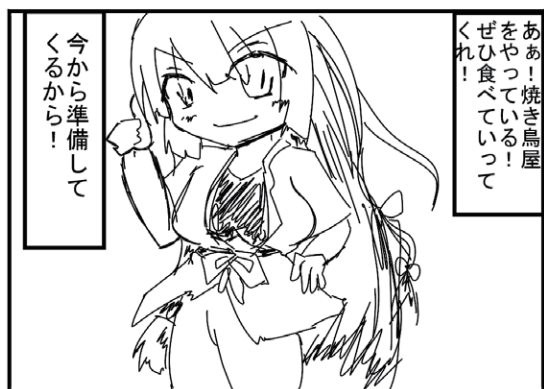
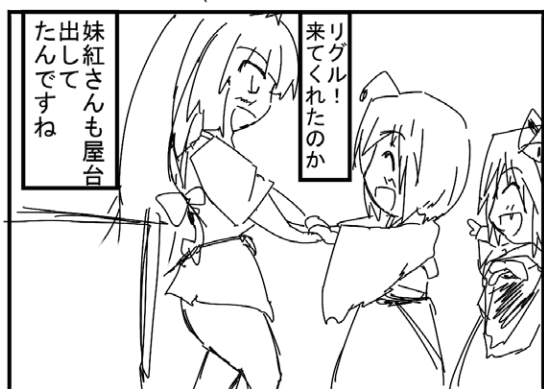
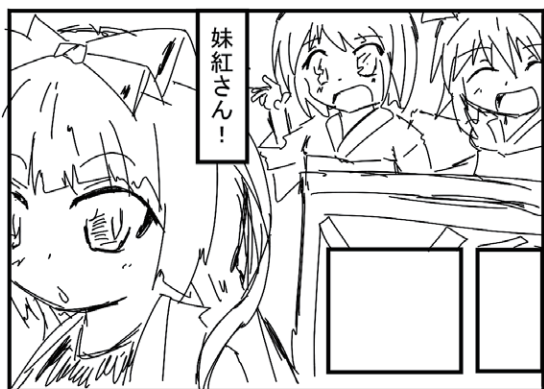
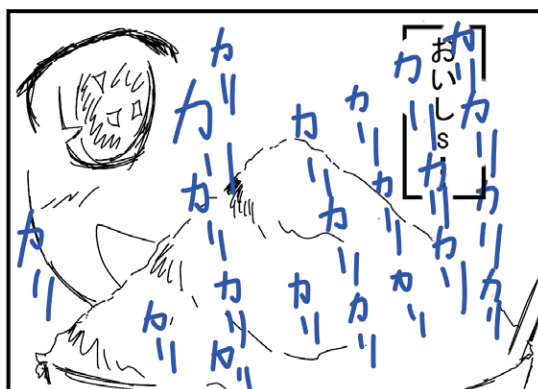
今から準備してくるから！

さぁ客が来たから捌かなきゃな

待って待って待って！私は屋台に戻らないと

何を言っているんだ、屋台はここだぞ？さっ、最初はもも部分を…

ちょっ！そんな事したら…

ギュウウア

わたあめ屋

地鶏屋

ホントすみません。

おまつり

キッカ

よーし、
みんなー!!

今日は
遊ぶぞー!
おーッ!!

祭り会場
やきそば
とうもろこし

やきとり
ようし、まずは
焼き鳥だーっ!
いらはい
いらはい
よっしゃーっ!

むぐ…

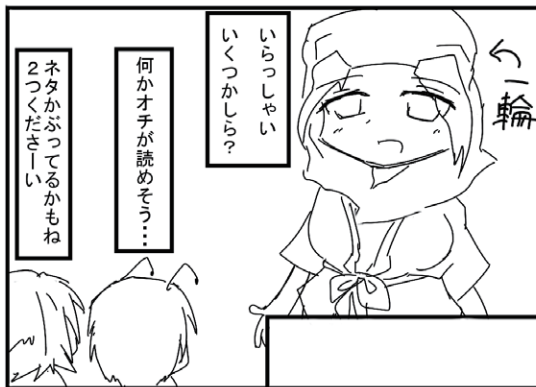
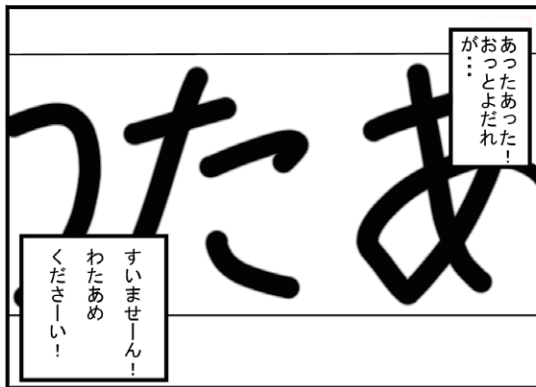
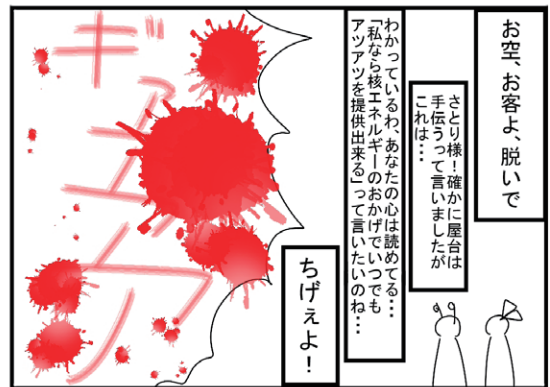
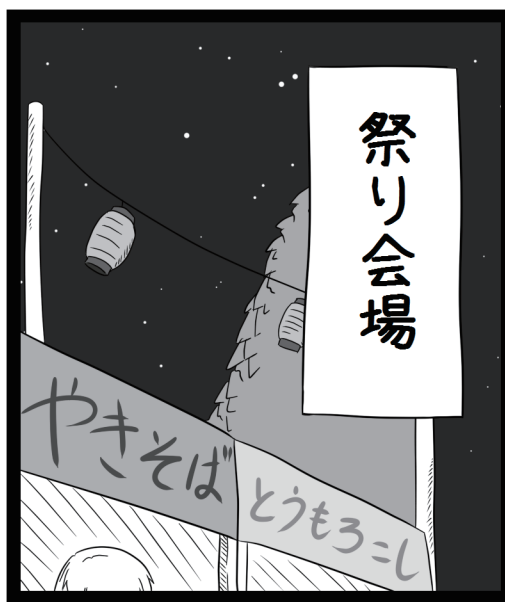
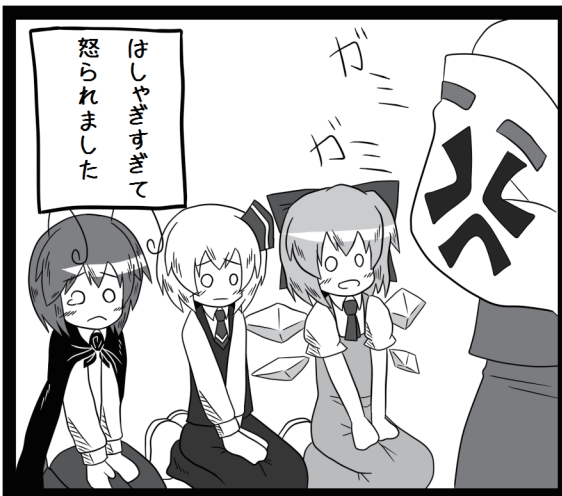
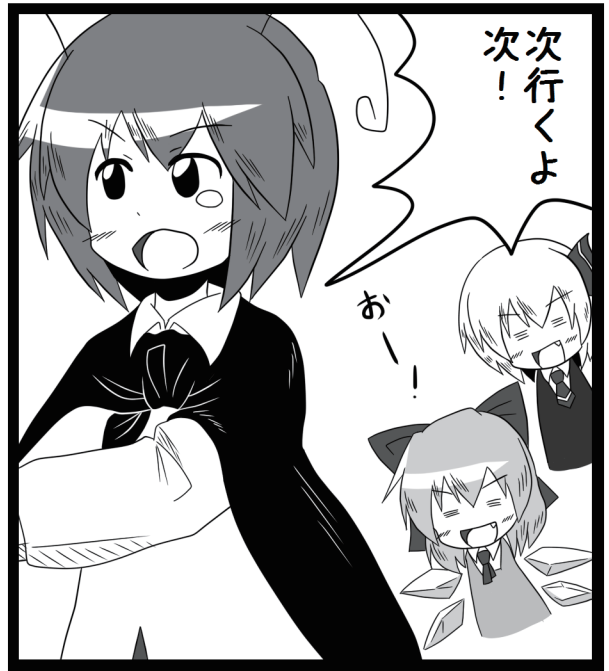
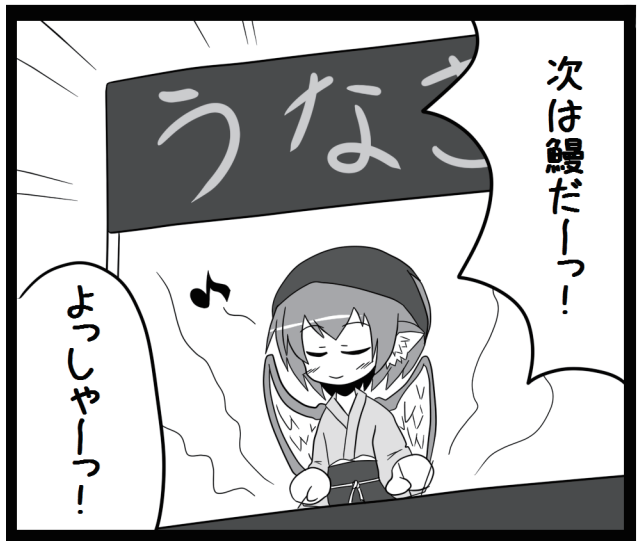
からーッ!
?
むぐむぐ

む……

うなさ
次は鰻だーっ！
よっしゃーっ！

あれも
これも
キャッ
キャッ

次行くよ次！
おーー！

はしゃぎすぎて怒られました
ガミ
ガミ

東方妄想録

ほんとごめんなさい…

楽屋ウラ的何か。

夏で脳がわいてるばーちょん

描いたヤツ

草加あおい

漫画・自由作品、表1～表4　作者コメント

リリカスタイル（リリ×リグ推奨委員会）
残虐非道の貴公子　*p2*

今回はdpiにも気を使って描いてみました。と、言うよりは今月あまり時間がなくて、作成中の動画のワンカットとの共用で描いた絵なんですけど。

eat up a empty pie
秋水　*p4～p10*

この月で投稿してから一年になるのですよ。一年前の漫画は目も当てられませんね、漫画にプロットとかコンテというものが必要だとは知らなくて頭に浮かぶものを描いてみただけの作品です。ああ、この漫画も闇歴史臭がぷんぷんしますね。でも、今しか描けないものを一生懸命描いています。

リグルが可愛くて生きるのが辛い
東　*p11～p14*

リグルさんの魅力を伝えたくて…実はパソコンが壊れてしまい、何も描けない状態なので、この前出した同人誌の原稿だったりしますがw

学園ナイトバグ
言示弄　*p15*

何故番長にしたんだろう。　スケバン要素が長いスカートしかないってのもなー

※この漫画にリグルは出てきません
羅外　*p16～p17*

今回、時間なくて間に合わないと思っていたら、実際に間に合いませんでした

リグルともこたん
ぼこ　*p18*

また訳の分からない４コマになってしまいました・・・

リグルの過冷なる挑戦
猫屋敷　*p19*

予定がどんどん遅れて(ry
こ、こんなはずでは…

東方茶湾虫
クロツク　*p39～p43*

ネタがかぶらなければいいいなぁと笹の葉に願いを。

夏の祭りと言えば
貴キ　*p44～p45*

なんか突然色々とすみません…；
苦情は8月14日東ノー31a「大和芋」にて受け付けます。
ミスリグで無事新刊出せますように…！

リグると！
ひどぅん　*p46*

夏祭りといえば夏コミ。
2日目、東ハ30b「りとる・ずぅ」にて、
オールキャラｘリグル本を予定してます。
あくまで予定だからね！

りぐるみゃの屋台巡り
豆板醤　*p47～p49*

水風船でびよーんびよーんしすぎて割れて水が全身にかかったのは今ではいい思い出デス

おまつり
キッカ　*p50～p51*

暑いぜ暑いぜ暑くてひぇぇ。夏祭りいいですね、雨だったので近所のお祭りには行きませんでしたが。

無題
草加あおい　*p52～p53*

何でこの３人なんでしょうね？ｗ　文ファンの方々、及びあっきゅんファンの皆様、そしてこーりんファンの皆様、本当にごめんなさい

表紙
小崎

イリュージョン！奇術師が壁に掛けた布を外すと編集後記が跡形もなく消えました。種も仕掛けも正義も秩序もありませんのこころ。

NEXT▶　次号9月号は8月22日（日）発行予定！
※次号の投稿締切は6月15日(火)です。
皆様からの投稿をお待ちしています。

参加者一覧
（敬称略・順不同）

小崎
是乃
草葉
中篠セツ
ネイキッドジェネラル
たま インダストリアル小五郎
東
東 ゆき
浜原義雄
羊箱
CREAM
Five-seveN
Gif
HOUSE
MASHU
TEC
うめきち
ウリグル獄長
くじらローラン
しゃき しゃき
ひどぅん
ぶーわ
ぽん
みどり
貴キ

リグル天国（てんごく）ゴールド

総勢25名のリグル好きが送る150P超のリグル愛され合同誌！

コミックマーケット78
2日目 東ノ－35a
RHRKにて頒布予定!!

http://xaver.sarashi.com/wriggle_go.html

月刊NIGHTBUG　2010年8月号

2010年7月22日発行
企画・編集：神楽丼／小崎

原作　上海アリス幻樂団
東方projectリグル・ナイトバグファン企画
web配布／自由投稿参加型月刊誌

ADDA
蛍光流動
怒羅悪
斑
夏樹　真
悠奈
如月翔
草加あおい
貴キ
豆板醤
草葉
クロツク
言示弄
東
猫屋敷
羅外
キッカ
ひどぅん
ぼこ
秋水
残虐非道の貴公子
小崎